

千代紙の春

小川未明

青空文庫

町はずれの、ある橋のそばで、一人のおじいさんが、こいを売っていました。おじいさんは、今朝そのこいを問屋から請けてきたのでした。そして、長い間、ここに店を出して、通る人々に向かつて、

「さあ、こいを買ってください。まけておきますから。」と、人の顔を見ながらいってました。

人たちの中では、立ち止まって見てゆくものもあれば、知らぬ顔をして、さっさといつてしまうものもありました。しかし、おじいさんは、根気よく同じことをいっていました。そうするうちに、「これは珍しいこいだ。」といって、買ってゆくものもありました。そして、暮れ方までには、小さなこいは、たいてい売りつくしてしまいました。けれど、いちばん大きなこいは売れずに、盤台の中に残っていました。

おじいさんは、大きなのが売れないので、気が気でありませんでした。どうかして、それをやく、あたりが暗くならないうちに売ってしまいたいと、焦っていました。

「さあ、大きなこいをまけておきますから、買ってください。」と、しきりにおじいさんはわめいていました。

みんな通る人は、そのこいに目をつけてゆきました。

「大きなこいだな。」と喋ってゆくものもありました。

そのはずであります。こいは、幾年か大きな池に、またあるときは河の中にすんでいたのです。こいは、河の水音を聞くにつけて、あの早瀬の淵をなつかしく思いました。また、木々の影に映る、鏡のような青々とした、池の故郷を恋しく思いました。しかし、盤台の中に捕らえられては、もはや、どうすることもできなかつたのです。そのうえに、もう捕らえられてから幾日もたつて、あちらこちらと持ち運ばれています。間に、すっかり体が弱つてしまつて、まつたく、昔のような元気がなかつたのであります。大きなこいは、自分の子供のことを思いました。また友だちのことを思いました。そして、どうかして、もう一度自分の子供や、友だちにめぐりあいたいと思ひました。「さあ、こいを買つていってください。もう大きいのが一ぴきになりました。うんとまけておきますから、買つていってください。」

おじいさんは、その前を通る人たちに向かつて、声をからして喋っていました。晩方の道を急ぐ人たちは、ちよつと見たばかりで、

「このこいは値もいいにちがいない。」と、心の中で思つて、さっさと喋つてしまふもの

ばかりでした。

大きなこいは、白い腹を出して、盤台の中で横になっていました。こいは、よく肥えていました。けれど、もはや水すら十分に飲むこともできなかつたので、この後、そんなに長いこと命が保たれようとは考えられませんでした。

春先であつたから、河水は、なみなみとして流れていました。その水は、山から流れてくるのでした。山には、雪が解けて、谷という谷からは、水があふれ出て、みんな河の中に注いだのです。こんなときには、池にも水がいつぱいになります。そして、天気の良い暖かな日には、町から、村から、人々が釣りをしに池や河へ出かけるのも、もう間近なころでありました。

あわれなこいは、そんなことを空想していました。

このとき、一人のおばあさんがありました。つえをついて、この橋の上にきかかりました。おばあさんには、心配がありましたから、とぼとぼと下を向いて歩いて、元気がなかつたのです。それは、かわいい孫の美代子さんが、体が悪くて、家にねていたからです。「どうかして、早く、美代の病気をなおしたいものだ。」と、おばあさんは、このときも思っていました。

美代子さんは、ちょうど十二でした。このごろは、体が悪いので学校を休んで、医者にいかっていました。けれどなかなか昔のように元気よく、快くありませんでした。そして、美代子さんは、毎日、ねたり起きたりしていました。起きているときは、お人の形の着物を縫ったり、また、雑誌を読んだり、絵本を見たりしていましたけれど、もとのように、お友だちと活発に、外へ出て駆けたりして遊ぶようなことはなかったのです。美代子さんのお母さんや、お父さんばかりではありませんでした。心配をしたのは、家じゅうのものでありました。

「ほんとうに、あの子の病気は、なぜなおらないのだろうか？」と、おばあさんは、いつもそのことを思いながら、つえをついて歩いて、橋のたもとにきかかったのです。

「さあ、こいをまけておきますから、買っていつてくください。」と、おじいさんはいつていました。

おじいさんは、早くこいを売って家へ帰りたいと思いました。家には、二人の孫が、おじいさんの帰るのを待っていたからです。おじいさんの家は貧乏でした。そして、おじいさんが、こうしてこいを売って金にして帰らなければ、みんなは楽しく、夕飯を食べることもできなかつたのであります。

「さあ、まけておきますから、こいを買っていつてください。」と、おじいさんは、熱心にいいました。

おばあさんは、それを聞くと、つえをつきながら、立ち止まりました。そして、橋のそばに、店を開いている、盤台の中の大きなこいに目を止めたのであります。

おばあさんは、こいを病人に食べさせるとたいそう力がつくという話を思い出しました。

「ほんとうに、いい大きなこいだな。」と、おばあさんはたまげたようにいいました。

「まけておきます。どうぞ買っていつてください。」と、おじいさんは声をかけました。

「うちの小さな娘が病気だから、それに買っていつてやろうと思つてな。」と、おばあさんはいいました。

「このこいをおあがりなされば、すぐに病気がなおります。」と、おじいさんは答えました。

おばあさんは、じつと大きなこいが、肥えた白い腹を出しているのをながめていましたが、

「なんだか、このこいは、元気がないな。じつとしている。」と、おばあさんは、ごごん

でいいました。

「どういたしまして、これが弱よわっているなどといったら、元げんきのいいのなどはありません。」と、おじいさんはいいました。

おばあさんは、それでもくびを傾かたむけていました。

「死しんでいるのではないかい。」と、おばあさんはたずねました。

「あんなに、口くちをぼくぼくやっているではありませんか。」と、おじいさんはいいました。

「いくらだい？」

「大おおまけにまけて一りよう両りようよりしかたがありません。」と、おじいさんは答こたえました。

「どれ、ちよつと尾おを持もつて、跳はねるか見みせておくれ。」と、おばあさんは、註ちゆう文もんを
しました。

このとき、ほんとうにこいは、死しんでいるようにじつとしていましたが、おじいさんは、おばあさんがそういうので、大おおきなこいの尾おを握にぎつて高たかくさしあげました。

こいは、このときだと思おもつたのです。いま自分じぶんが逃にげなければ数すう分ぶん間のうちうちに殺ころされ
てしまうと思おもいましたから、力ちからまかせに、おじいさんの腕うでを尾おでたたきつけて、おじいさ
んがびっくりして、手てを放はなしたすきに河かわの中なかへ一ひとと飛とびに、飛とび込こんでしまったのです。

「あ、こいが逃げた！」

と、通りすがりの人々は叫んで、黒くその前に集まりました。おじいさんも、おばあさんも、びつくりしましたが、中にもおじいさんは、この大きないを逃がしてしまったので大損をしなければなりませんでした。孫たちに夕飯のおかずを買ってゆくどころでありませんでした。

「尾をつかんで、上げてみせろなどといわなけりや、こいが逃げてしまうことはなかったのです。どうか、このこいのお金をください。」と、おじいさんは、おばあさんにいいました。

おばあさんは、甲高な調子になつて、

「なんで、受け取りもしないのに、代金を払うわけがあるかい。かわいい孫の口に入らないものを、私は、お金なんか払わないよ。」と、争っていました。

このとき、集まった人々の中から、頭髪を長くした易者のような男が前に出てきました。

「おばあさん、こんなめでたいことはありません。死んだと思つたこいが跳ねて河の中へ躍り込むなんて、ほんとうにめでたいことです。きつとお孫さんのご病気は、明日から

なおりますよ。孫まごのかわいいのは、だれも同じおなことです。このおじいさんにもかわいい孫まごが家うちに待つまっているのだから、おばあさん、こいの代だい金きんをはらっておやりなさい。」と、その髪かみの長い男おとこはいいました。おばあさんは、こいの代だい金きんなんど払はらうものかと思おもっていました。が、いまこの男おとこのいうことを聞きくと、なるほど、もつともだと思おもいました。そこで、おばあさんは、しなびた手てで財布さいふの中なかから銭ぜにをとり出して、おじいさんに払はらってやりまし
た。

おじいさんは、おばあさんが、こいの代だい金きんを払はらってくれとにこにこしました。そして、ふところから美うつくしい千代紙ちよがみを出だしました。

「おばあさん、この千代紙ちよがみは、私わたしが孫まごに土産みやげに持つもていってやろうと思おもいましたが、なにも今日きょうに限かぎったことでない。どうか、ご病びょう氣きのお孫まごさんに持つもていってあげてくださいまし。」と、渡わたそうとしました。

おばあさんは目めを丸まるくして、

「千代紙ちよがみなら、うちの子こはたくさんもつていますよ。そんなものはいりません。」と、いって断ことわりました。けれどおじいさんは、無理むりに千代紙ちよがみをおばあさんに手渡てわたしました。

「そういうものでありません。またちがった色いろの千代紙ちよがみをもらうと、子供こどもというものは、

喜ぶものですよ。「と、おじいさんはいいました。」

おばあさんは、千代紙をもらって、ふたたび、とぼとぼとつえをついて歩いて帰りました。空には、いい月が出ていました。おばあさんは、家に帰って、こいが跳ねて河の中に飛び込んで、そのお金を払ったということを話しますと、美代子さんのお母さんは、「おばあさんが、こいを受け取りもなさらないのに、逃げたこいのお金を払うのは、ほんとうにばかばかしいことですね。」といわれました。けれど、美代子のお父さんは、「それはめでたいこった。きつと美代子の病気はなおってしまುದらう。」と、ちやうどあの髪の毛の長い、易者がいったようなことをいわれました。

そして、おばあさんが、こいが逃げたときのことをくわしく、みんなに話しますと、うちじゆうのものは、そのときの有り様がどんなにおかしかったらうと行って、声をたてて笑いました。美代子さんは、明るい燈火の下でこの話を聞いていましたが、やはりおかしくてたまりませんでした。そして逃げていったこいは、いまごろどうしたらう。河をのぼって、自分の故郷へ帰つたらうか。そうであつたら、こいの子供や、お友だちは、どんなに喜んで迎えたらうと考えました。

おばあさんは、たもとの中から、美しい千代紙を出して美代子さんに与えました。

「この千代紙は、こい売りのおじいさんが、孫に買って行ってやろうと思つたのを、おまえが病氣だといふのでくれたのだよ。」と、おばあさんはいわれました。

「しんせつなおじいさんですね。」と、美代子さんのお母さんは、いわれました。

「こいのかわりに、千代紙をもらったのさ。」と、お父さんは笑われました。美代子さんは、そのこい売りのおじいさんにも、また自分のような年ごろの孫があるのだと知りました。そして、その子は、どんなような顔つきであろう？ なんとなくあつてみたいような、またお友だちになりたいような、なんとなくなつかしい気持ちがありました。

「先生が、今日おいでになって、美代子は、お腹に虫がわいたのではないか？ そのお薬をあげてみようとおっしゃいました。きつとそうかもしれませぬよ、あんまりいろいろなものを食べますからね。」と、お母さんは、お父さんにいわれました。

「おばあさん、こいは食べないほうがよかつたかもしれませぬ。」と、お父さんはいわれました。

「早くなおつて、学校へゆくようにならなければいけません。もうじきに花が咲くのですもの。」と、お母さんは、だれにいうとなく話されました。

美代子さんは燈火の下で、千代紙をはさみで細かに切つて、いろいろな花の形を造つて

いました。そして、病びよう氣きがなおつたら、お友ともだちと野原のや、公園こうえんへ遊あそびにゆこうと考かんえていました。窓まどを開あけると、いい月夜つきよでした。美代子みよこさんは、自じ分の造つくった千代紙ちよがみの花はなをすつかり、窓まどの外そとに投なげ散ちらしました。

二、三日にちすると、庭にわには、いろいろな花はなが、一時じにつぼみを破やぶりました。千代紙ちよがみの花はなが、みんな木きの枝えだについて、ほんとうの花はなになったのです。そして、美代子みよこさんの病氣びようきはすつかりなおりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「少女倶楽部」

1923（大正12）年9月

※表題は底本では、「千代紙《ちよがみ》の春《はる》」となっています。

※初出時の表題は「千代紙」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千代紙の春

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>